

# 赤嶺原遺跡

1985年3月

鹿児島県大島郡知名町教育委員会

## 序 文

この報告書は、本町教育委員会が土地基盤整備地区に所在する「赤嶺原遺跡」発掘調査の記録であります。

本遺跡は、昭和58年度分布調査を実施した際に発見されました。

調査の結果先史時代の土器片、須恵質土器、青磁、白磁などが発見されたが、残念なことに包含層が耕作により攪乱されており層序関係を明確にすることはできませんでした。

その後記録や遺物の整理も進み、ここに調査報告書発行の運びとなりました。

この報告書が郷土史の研究、文化財の保護及び愛護思想普及のため活用いただければ幸いに存じます。

おわりに、この発掘調査に終始ご尽力くださいました文化庁、県教育委員会並びに地元の方々に厚く感謝申しあげます。

昭和60年3月

知名町教育委員会

教育長 平 良 清 義

## 例　　言

1. 本報告書は、知名町教育委員会が、国及び県の補助を得て、昭和59年度に実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は県営畑地帯総合土地改良事業（知名東部地区）に伴う事前調査として実施した。
3. 本書の執筆編集は戸崎勝洋・宮田栄二が行った。
4. 本書に用いたレベル数値は海拔絶対高である。
5. 遺物番号は通し番号として付した。

## 目 次

### 序 文

### 例 言

第1章 序 説 .....	1
第1節 調査に至るまでの経過 .....	1
第2節 調査の組織 .....	1
第2章 遺跡の地理的環境 .....	2
第3章 遺跡の史的環境 .....	6
第4章 調 査 .....	11
第1節 調査概要 .....	11
第2節 層 位 .....	15
第3節 遺 構 .....	16
第4節 遺 物 .....	17
第5章 ま と め .....	25
あとがき .....	27

## 挿 図 目 次

第1図 沖永良部島地質図 .....	3
第2図 遺跡周辺地形図 .....	5
第3図 赤嶺原遺跡と周辺遺跡 .....	9~10
第4図 グリッド配置図 .....	14
第5図 土層断面図 .....	15
第6図 土器実測図 .....	17
第7図 須恵質土器実測図 (1) .....	19
第8図 須恵質土器実測図 (2) .....	20
第9図 須恵質土器実測図 (3) .....	21
第10図 青磁・白磁実測図 .....	22
第11図 陶磁器実測図 .....	23
第12図 染付・摺鉢実測図 .....	24

## 写 真 目 次

1	さんご礁	2
2	カルスト地形	2
3	遺跡遠景・近景	4
4	中甫洞穴	6
5	住吉貝塚	6
6	イクサ洞穴	6
7	アーニマガヤ	7
8	土層断面・発掘調査風景	12
9	遺跡見学会風景	13
10	スクニィジュ	16
11	スクニィジュ内出土磁器	16
12	スクニィジュ内出土染付	16
13	土器（縄文時代）	18
14	須恵質土器（1）	19
15	須恵質土器（2）	20
16	須恵質土器（3）	21
17	青磁・白磁	22
18	陶磁器	23
19	染付・摺鉢	24

## 表 目 次

表1	遺跡地名表	8
----	-------	---

## 第1章 序 説

### 第1節 調査に至るまでの経過

鹿児島県教育委員会（以下県文化課）は、文化財の保護、活用を図るために、知事部局の開発関係各課と、事業着手前に当該事業区内における文化財の有無等について協議し、諸開発との調整を行っている。

この事前協議制に基づき、鹿児島県農政部農地整備課（以下県農地整備課）は数年次の事業計画を県文化課に示し、文化財の分布調査及びその後の取扱いについて協議を求めている。

知名町内においても、「県営畠地総合改良事業、知名東部」が計画されたために県文化課に照会があった。

県文化課はこれを受け、昭和58年5月、当該地区の文化財分布調査を知名町教育委員会社会教育課の応援を得て実施した。対象面積は約58ヘクタールである。

この分布調査によると、本遺跡を含む小丘陵地のうち、南側部分に主として土器が、その他畠地一面に青磁等が採集された。

この結果をもとに、県農地整備課、県文化課、知名町教育委員会でその取扱いを協議したところ、事業着手前に確認調査を実施することとなった。

発掘調査は、国、県の補助を得て知名町教育委員会が発掘調査主体者となり、調査は県文化課に依頼した。

### 第2節 調査の組織

調査主体者 知名町教育委員会

調査責任者 " 教育長 平良 清義

調査事務 " 社会教育課長 神川 一郎

" 社会教育主事 木本 洋一

" 主事 大山 優

" " 大納 京子

調査担当者 鹿児島県教育委員会文化課 文化財研究員 戸崎 勝洋

" 主事 宮田 栄二

発掘作業員

梶山吉一 坂元乙枝 瀬戸ロツル 民カヨ子 富岡トミ 中野はるみ 中原重子

東流子 前島ハル 宮田賀代子 三原豊子 吉田マツ

整理作業員

高瀬孝子 中川ミキ 木田安枝 高倉晴美 山口富子 七枝良子 大木はるみ

企画及び調査については、県文化課（課長 桑原一廣）をはじめ、埋蔵文化財担当、管理係の各氏の指導助言を得た。

## 第2章 遺跡の地理的環境

赤嶺原（アーニバル）遺跡の所在する大島郡知名町は隣接する和泊町とともに沖永良部島に属する。

沖永良部島は弧状に連なる南西諸島のほぼ中央部、鹿児島県本土から約450kmで、奄美諸島南部の徳之島と与論島の中間に位置する。

沖縄本島の北部とは与論島を中ほどに置いた指呼の距離である。この沖永良部島は北東から南西に延びる長さ約20km、最大幅約9km、最高所の大山でも標高245.9mの平坦な島である。

海岸線はきわめて単調であるが、南岸線では凸形を呈するのに対して、北岸線は凹形を呈し海食崖が連続して発達している。この海岸線を取り囲むようにさんご礁が発達している。

このさんご礁は南部海岸が顯著である。

また島の地質は、古生層を基盤として、第四紀琉球層群（隆起さんご礁）からなりカルスト地形が発達している。

このため大山山麓を中心にはカルスト地形特有のドリーネが同心円状に多数見られ、昇龍洞や水蓮洞に代表される鐘乳洞が200～300近く分布する。

この洞内を流れる地下水は海岸線近くで湧水となり、あるいは段丘境で湧水となったものは小河川を形成して海岸に流入する。

したがって集落もこの湧水が条件となって立地する。

ある集落では、湧水を求めて地下約40mに及ぶところに水汲みを行う所さえあった。

これを「暗川（クラゾー）」という。

沖永良部島の気候は亜熱帯気候に属するため四季を通じて温暖高湿である。

降水量も全般的に多い。



写真1 さんご礁



写真2 カルスト地形

温暖な気候に恵まれた沖永良部島のはば中央部（知名町東北部），南部海岸線より約2.1kmの内陸部に赤嶺原遺跡は位置する。

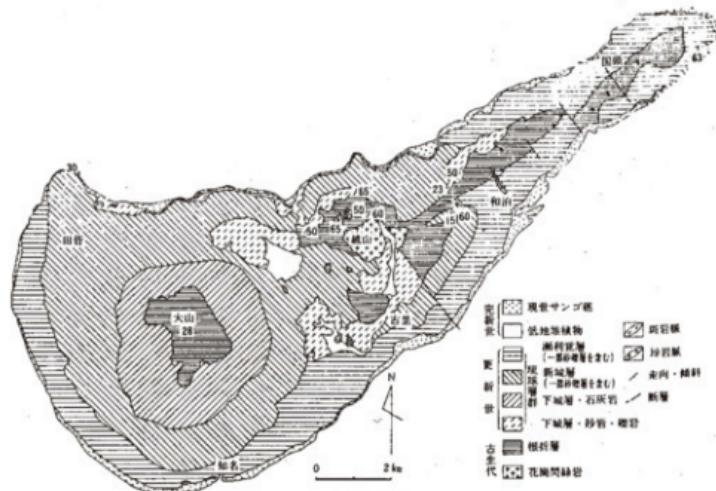
遺跡の所在するあたりは，南部海岸へ流入する余多川及び余多川の支流である竿津川の源流が囲む。

竿津川は遺跡の北，西，南の三方の隆起さんご礁の段丘境の湧水点を源流とし，おのおの3本の小川となり遺跡の北東部で合流する。この間小川は周辺を浸蝕し谷間を作り，その結果遺跡地は独立状の丘陵を呈する。

周辺の低地とは比高差10～15mを測る。

周辺の低地はさとうきびや田芋の栽培が行われ，丘陵地は畑地として，さとうきび，グリンピース，エラブユリ，フリージャ等の栽培に利用されている。

このあたりの土壌は，隆起さんご礁の風化土（マサ土—地元ではマージと呼ぶ）である。この土壌は赤褐色を呈し，粘質土のきわめて強い土である。マサ土は5～6mに及ぶところもあり，ついで基盤の隆起さんご礁となる。



第1図 沖永良部島地質図「知名町誌より」



遺跡遠景（北西より）



遺跡近景（南より）



写真3 遺跡近景（西より）



第2図 遺跡周辺地形図（太線内発掘対象区）

### 第3章 遺跡の史的環境

沖永良部島は、地理的環境で述べたように、隆起さんご礁で平坦な地形であるために河川の発達は少なく、湧水点も段丘境か海岸線に片寄るために、集落立地は自ずからこれ等の地を選ぶこととなる。

したがって古代の遺跡も海岸沿いかカルスト地形による鐘乳洞を主体とする。赤嶺原遺跡のように内陸部で平地というのはごくまれな遺跡といえよう。

ところで、沖永良部島における考古学的調査研究は、昭和20~30年代の和泊町畦布わんじょうナーバンタ遺跡、知名町住吉貝塚に始まる。

住吉貝塚は知名町住吉金久の海岸近くに位置し、発掘調査の結果、内径2.4m×1.8mの矩形に石を組み、北隅及び西南側は石を並べ、外側にも小石をつめて壁を固め東隅から東南及び西南側に至る側壁は自然のさんご礁の岩石面を調整した住居址が検出された。時期は宇宿上層式から細隆起文と沈線を施した時期とされている。

遺物としては、土器、石器、牙器、貝製品等が出土している。

またこの報文中に、知名町内では屋子母遺跡が紹介されている。

これ等河口貞徳氏の発掘調査は、沖永良部島における考古学研究の嚆矢となったのである。

また三島格、高宮廣衛、白木原和美、上村俊男氏等の調査研究で、島内における遺跡の発見、発掘調査が勢力的に進められた。

昭和57年8月には、隣接する和泊町誌執筆の依頼を受けた河口貞徳氏は、知名町久志検水窪の中甫洞穴出土の採集品の中の爪形文土器に注目された。

爪形文土器は、縄文時代草創期に比定されることから、沖永良部島における先史時



写真4 中甫洞穴



写真5 住吉貝塚

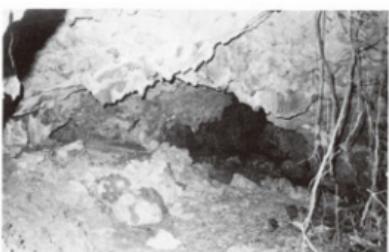


写真6 イクサ洞穴

代は、一挙に遡ることとなった。

中甫洞穴はこの発見を契機に3次に亘り発掘調査が進められ、爪形文土器や縄文時代前期に該当する轟式土器、あるいは轟式土器と相前後する土器群のほか、石器、人骨も出土し、多大の成果を挙げられた。<sup>注</sup>

この中甫洞穴は、赤嶺原遺跡の北西、約1kmの錦乳洞内に位置するものである。

昭和57・58年には鹿児島大学と沖縄国際大学により、スセン當貝塚、神野貝塚の発掘調査が行われた。特に神野貝塚における出土土器は、沖縄と奄美との関連を把握するうえで多くの資料を提供したといえる。<sup>注</sup>

昭和59年には地元の大山倭氏（知名町教育委員会）により、イクサ洞穴が発見され、貝輪、土器等が採集された。このように沖永良部島における考古学的成果は、近年目ざましいものがある。

赤嶺原遺跡の台地は、13～17世紀にかけての琉球服属時代「那崩世（ナハヨ）」、赤嶺を統治していたというアーニ・アニディル（赤嶺の赤嶺殿）の墓が有った所（現在では畑の隅に移設）ともいう。また遺跡の北西約1kmには風葬墓のアーニマガヤがあり、歴史時代に至っても、歴史は土地に深く刻み込まれている。

（注）

- (1) 河口貞徳『奄美大島の先史時代』『奄美その自然と文化』九学会連合奄美大島共同調査会編 1959
- (2) (1)と同じ
- (3)・鹿児島短期大学附属南日本文化研究所が沖永良部島総合学術調査を実施。調査団の一員の白木原和美・上原俊雄氏により10ヶ所の遺物散布地発見
- ・高宮廣衛「沖永良部島における先史遺跡調査概要」『南島文化研究所所報第9号』沖縄国際大学南島文化研究所 1980
- ・高宮廣衛・島袋洋「沖永良部島の先史遺物」『沖永良部島調査報告書<地域研究シリーズNo.2>』沖縄国際大学南島文化研究所 1981
- ・上村俊雄「沖永良部島の考古学」『鹿大考古2号』鹿児島大学法文学部古学研究室 1984
- (4)・河口貞徳・本田道輝・瀬戸口望『中甫洞穴』鹿児島考古
- ・河口貞徳・本田道輝「中甫洞穴」知名町埋蔵文化財発掘調査報告書知名町教育委員会(1)1984  
・〃〃〃〃(2)1985
- (5)・上村俊雄・本田道輝「沖永良部島スセン當貝塚発掘調査概要」『鹿大考古第2号』鹿児島大学法文学部考古学研究室 1984  
他に上村俊雄・本田道輝のCトレンチ発掘調査概要がある。
- (6) 「知名町誌」知名町 1982



写真7 アニマガヤ

表1 遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	地形	遺物等	備考
1	赤嶺原	知名町	台地		本報告
2	中甫洞穴	"	鍾乳洞	土器(爪形文,轟式他)人骨石斧・動物骨	①
3	アーニマガヤ	"	山麓	染付・風葬骨	
4	余多石原	"	台地		②
5	イクサ洞穴	"	鍾乳洞	土器・貝輪等	昭58年発見
6	屋者の墓	"	台地	染付・風葬骨	
7	芦清良善兼久	"		南島系土器	③
8	平城	"	台地		
9	永良部洞穴	"	"	繩文土器・須恵器	③
10	大津勘長浜貝塚	"	砂丘	土器(室川下層式)・市来式・面 縄前庭・磨石・貝製品	④
11	スセン當貝塚	"	"	南島系土器・石斧・貝輪・貝玉	⑤
12	屋子母セージマ	"	台地	土器・石斧・燧石	⑥
13	神野貝塚	"	砂丘	南島系土器・石器・貝製品	⑦
14	フーバマド	"	砂丘	くぼみ石・南島系土器	⑧
15	住吉貝塚	"	台地	住居址・石斧・燧石・石皿・牙器 貝製器(貝輪・貝匙) 土器(字宿上・下層式他)	⑨
16	田皆井美畑	"	台地	石斧	⑩
17	新城シャート墓	"	"	染付・風葬墓	
18	永嶺小牟野	"	"		

(注)

① 河口貞徳・本田道輝・瀬戸口望「中甫洞穴」『鹿児島考古17号』 1983

他に河口貞徳・本田道輝「中甫洞穴」知名町埋蔵文化財発掘調査報告書(1)1984

" " " (2)1985

② 高宮廣衛・島袋洋「沖永良部島の先史遺物」沖縄国際大学南島文化研究所 1981

③ 上村俊雄・本田道輝「沖永良部島の考古学」『鹿大考古』2号鹿児島大学法文学部考古学教室 1984

④ ②と同じ

⑤ ③と同じ

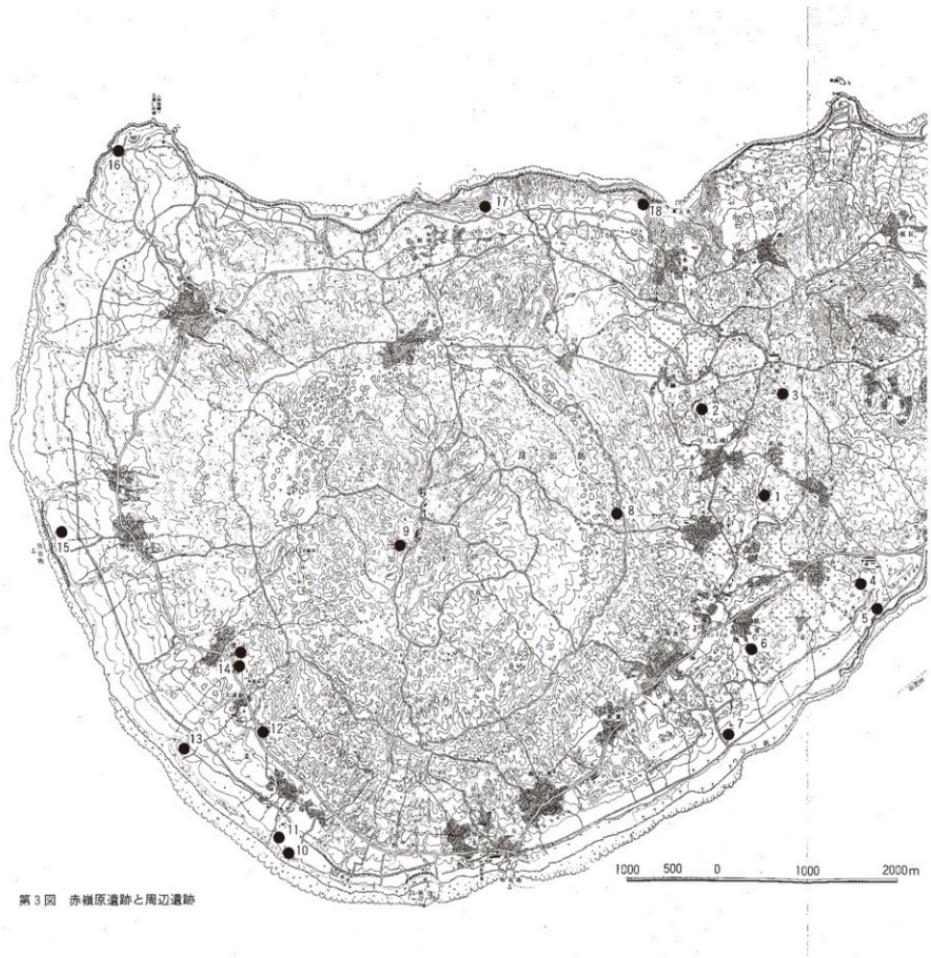
⑥ 河口貞徳他「奄美大島の先史時代」『奄美その自然と文化』九学会連合奄美大島共同調査会編 1959

⑦ ③と同じ

⑧ ③と同じ, ②と同じ

⑨ ⑥と同じ

⑩ ③と同じ, ②と同じ



第3図 赤嶺原遺跡と周辺遺跡

## 第4章 調査

### 第1節 調査概要

赤嶺原（アーニバル）遺跡は、余多川の支流竿津川によって四方が開拓されたため独立丘を呈している。現況は東側傾斜地を除きすべて畑地である。

今回の発掘調査は、この丘の畑地うち分布調査で多数の土器類を採集した地点を重点的に実施し結果によつては、丘全体を対象区とすることとした。発掘区域は、さとうきびの収穫後のハカマの除去から始めた。

発掘調査実施にあたつて、5m×5m方眼を単位とするグリッドを設定し、北から西へA～D、北から南へ1～5とし、それぞれA-1区、B-2区と呼称することとした。

発掘は表土より順次掘下げていった。遺跡地は粘質土のために雨天時は泥状となり困難であった。遺物はI、II層中より土器、須恵器、磁器等が出土し、III層は無遺物層であった。このI、II層は耕作土であるから、遺物包含層は耕作や畑地造成のために擾乱していたことになる。

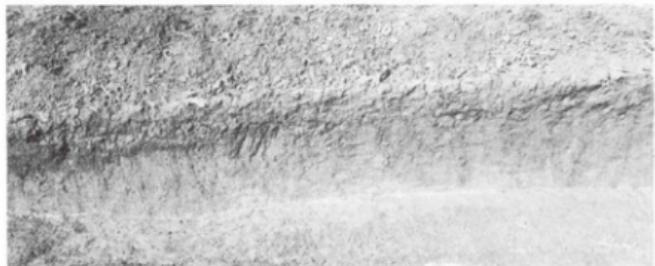
発掘調査は昭和60年1月7日から1月23日まで行い、172m<sup>2</sup>を発掘した。

なお、報告書作成のための整理作業は県文化課収蔵庫（姶良郡姶良町重富）で行った。

調査経過は以下略記する。

#### 日誌抄

- 1月7日(月) 知名町着、グリッド設定のち掘下げ。  
1月8日(火) E-8、12区掘下げ。青磁、陶器片等出土。  
1月9日(水) H-13、E-5、8、13区掘下げ。土器、青磁、白磁、染付等出土。  
1月10日(木) E-13、15区掘下げ、H-13区II層掘下げ。II層は無遺物層と確認する。  
1月11日(金) H-10、G-7区掘下げ。遺物実測のち取上げ。土器、青磁等出土。  
1月12日(土) H-10、G-7区掘下げ。遺物実測、I、II層とも耕作土。遺物包含層なし  
1月13日(日) 宿舎にて図面整理。  
1月14日(月) K-13区に石列検出、確認のため拡張する。遺物実測。  
1月15日(火) 石列確認のため再度拡張。この石列はスクニィッシュ（排水用施設）と判明。  
1月16日(水) 石列中より青磁、白磁等出土。遺物実測。上平川小現地見学。  
1月17日(木) H-10区ビット掘下げ。ビット内埋土に土器片出土。遺物実測。  
1月18日(金) 雨のため出土遺物水洗。  
1月19日(土) 雨のため出土遺物水洗。  
1月20日(日) 宿舎にて図面、遺物整理。  
1月21日(月) 断面実測のため壁面調整、知名小現地見学。  
1月22日(火) 各トレンチ断面図作成、用具点検。  
1月23日(水) 各トレンチ埋戻し。  
1月24日(木) 各トレンチ埋戻し。  
1月25日(金) 各トレンチ埋戻し。用具、出土遺物収納。



土層断面



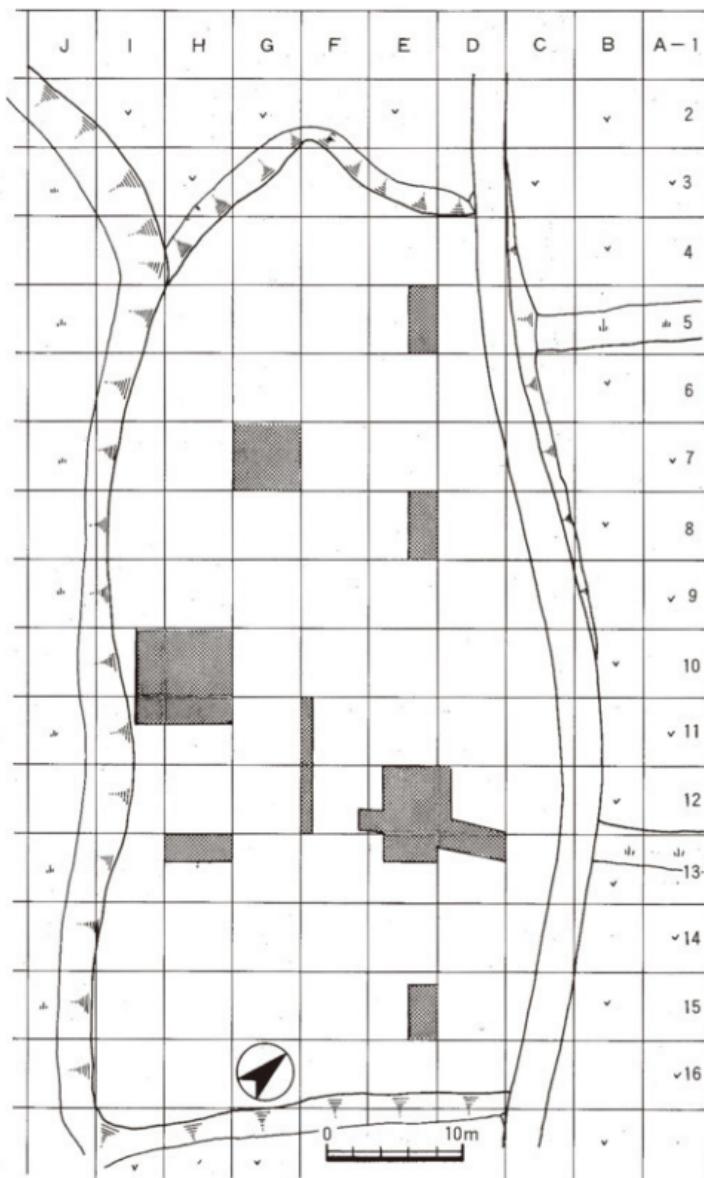
発掘調査風景



写真 8



写真9　遺跡見学会風景



第4図 グリッド配置図

## 第2節 層位（第5図）

小河川、竿津川の侵食により独立丘状を呈する本遺跡は、今回発掘調査を実施した丘の中央部が標高約60.5mを測り、最高地点である。

この最頂部から北、西、南は比高差約10～15mをもって低地になる。東は緩傾斜面となりやはり低地に続く地形を呈している。

層序もこの傾斜に従って傾斜する。遺跡地は以前個人による造成が行われたことや、Ⅲ層までの層厚30～40cmと薄いために、すでに擾乱を受けていた。

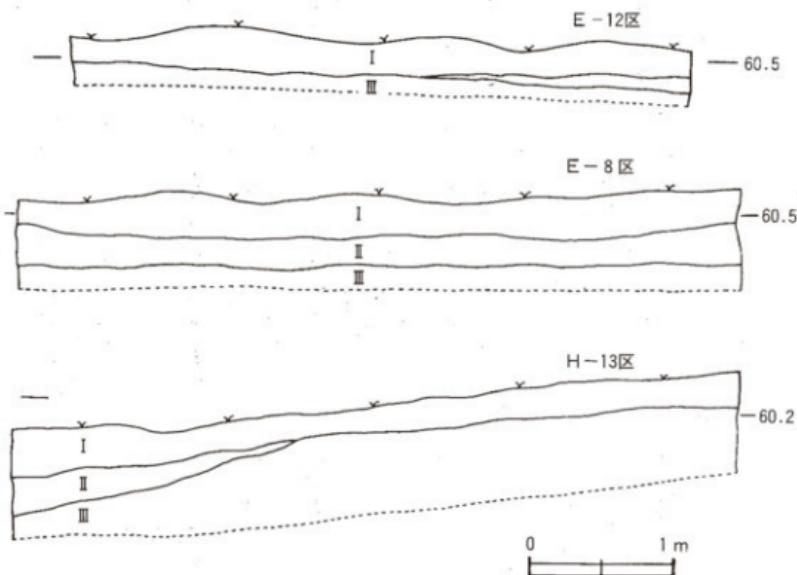
出土した遺物のなかに縄文時代に該当する土器も認められることから、かつては遺物包含層も存在していであろうが、今日では前述のとおり著しい擾乱を受けて皆無であった。

層位は以下の通りである。

I層 茶褐色粘質土層。  
II層 赤褐色粘質土層。 } いずれも耕作土

III層 赤色粘質土層（隆起さんご礁の風化土—マサ土）。

遺物は、I～II層中に出土するが、擾乱のため時代的に上下逆転して出土することが多い。



第5図 土層断面図

### 第3節 遺構（写真10.11.12）

検出した遺構はピット2つと、スクニィジュと呼ばれる排水施設のみである。

ピットは本調査区の南側で台地先端部H-10区に、Ⅲ層に掘り込んだものである。1つは径60cmの略円形を呈し深さ8cm、1つは径52×20cmの梢円形を呈し、深さ7cmを測る。いずれも上面は削平されているため本来の形状は不明である。ピット内の埋土中に土器片が出土した。時期等は不明である。

地元でスクニィジュと呼ぶ排水施設はF-12、D-12.1.3区に検出された。幅約80cmで、さんご礁や川原石を利用したもので、粘質土の烟の排水を良くするものである。礁中に、陶磁器等が混在している。この施設は現在でも使用するとのことで、初現は不明である。



写真10　スクニィiju（南より）



写真11　スクニィiju内出土磁器



写真12  
スクニィiju内出土漆付

#### 第4節 遺 物

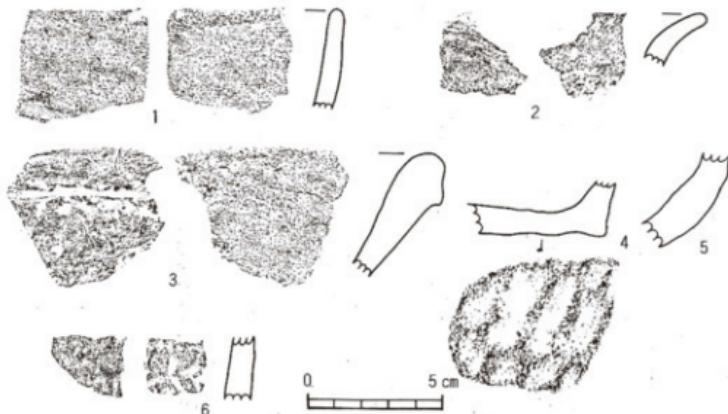
本遺跡出土の遺物は、縄文時代該当の土器、須恵質土器、青磁、白磁、陶磁器等である。

これ等の遺物は、Ⅰ、Ⅱ層（耕作土）中から出土することから、遺物包含層は畑地造成のためすでに失われたものと考えられる。ただ、遺物の出土地点については、耕作土中であってもわずかな変化がみられる。すなわち、土器は本遺跡の南側傾斜面を主に分布する。

このことは、遺跡中央部を頂点とし南側等へ傾斜する地形を、中央部を削平し傾斜部へ引きならしたことのほか、傾斜部のためかつての遺物包含層も比較的厚く、削平や、流失が少なかったことも意味するのかもしれない。他の遺物はほぼ全域に出土した。スクニィジュ中にも遺物が出土した。

##### 1 土器（第6図・写真13）

いずれも少片で、全体の形状を知るものはなかった。1はH-10区に出土したもので直口する口縁部をもつものである。色調は内外面とも黒褐色を呈し、胎土は石英、雲母を含み焼成とともに粗い。文様、条痕は剥落が著しいため不明。2はH-10区に出土したもので、外反する口縁部をもつものである。3はE-13区に出土したもので、肥厚する口縁部を有する、色調、胎土とも1と同じである。4・5は底部である。4はH-10区に出土したもので平底でやや角筒気味である。底面には太い押圧が平行に施されている。5はI-10区に出土したもので、やや丸底氣味である。色調、胎土とも1と同様である。6はG-7区に出土したもので、茶褐色を呈し胎土は良い。内面には布目痕が認められる。



第6図 土器実測図

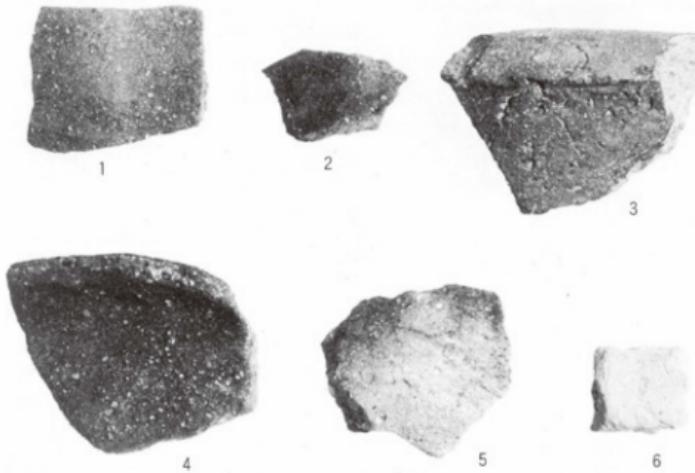


写真13 土器（縄文時代）

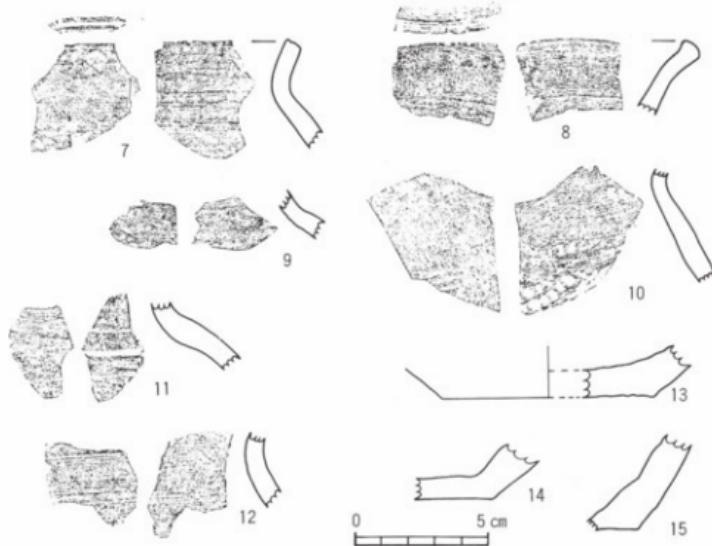
2 須恵質土器（第7・8・9、写真14・15・16）

いずれも少片で全体の形状を知り得るものはない。7、8は甌口縁部で、色調は青灰色を呈し、内外面ともロクロ整形痕が横位に残る。E-12区、E-18区出土である。9～12は頸部片である。このうち10はH-10区出土で青灰色を呈し外面肩部に条痕、内面には格子目印を有する。胎土、焼成とも良い。12はE-15区出土で、黒褐色を呈し、内外面ともロクロ整形痕が横位に残る。器断面でみる色調は茶褐色を呈する。この傾向は11、13～14に共通してみられるものである。13～15は平底の底部である。16は外面に綾杉状の印目、内面には横位の粗い条痕が施されている。色調は外面が濃い青灰色、内面は黒褐色を呈す。胎土にはさんご礁粒を含み、茶褐色を呈する。17も綾杉状の印目と内面に粗い格子印目が施されている。

18～21は外面に条痕、内面に格子印目が残る。色調は19の暗茶褐色を除いていずれも青灰色を呈する。胎土にはわずかであるがさんご礁が含まれている。22は内面に粗い条痕、23、24には内面に羽状の印目が施されている。色調はいずれも灰色を呈する。

25は内面に板状工具様により、横位あるいは斜位の条痕がみられる。色調は外面が暗茶褐色、内面が青灰色を呈し、胎土は茶色に焼しまる。26、27も内面に板状工具様の条痕がみられ、胎土も25同様である。

28、29は内面に粗い条痕がみられ器面の調整はやや粗雑である。30は外面は茶褐色、内面は茶色を呈し、横位に凹凸がみられる。31は内外ともに灰色を呈し器壁は厚い。



第7図 須恵質土器実測図(1)

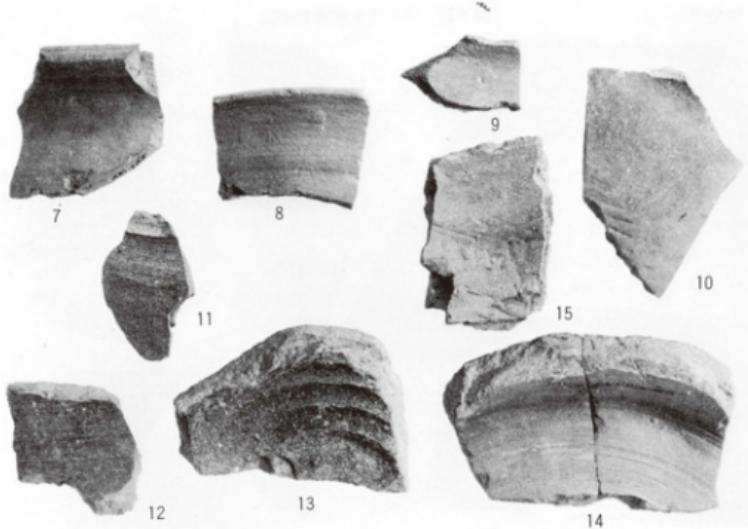
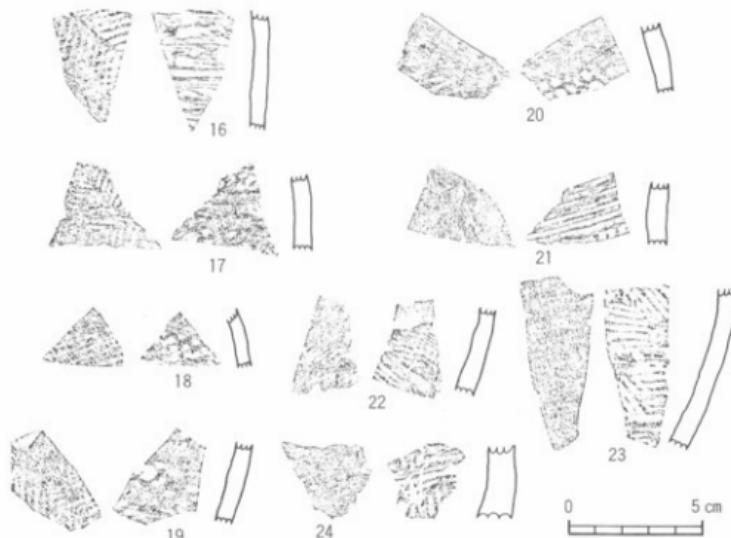


写真14 須恵質土器(1)



第8図 須恵質土器実測図(2)

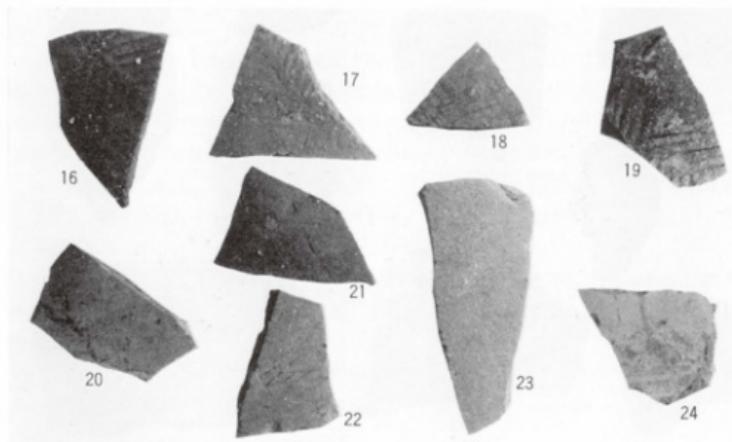
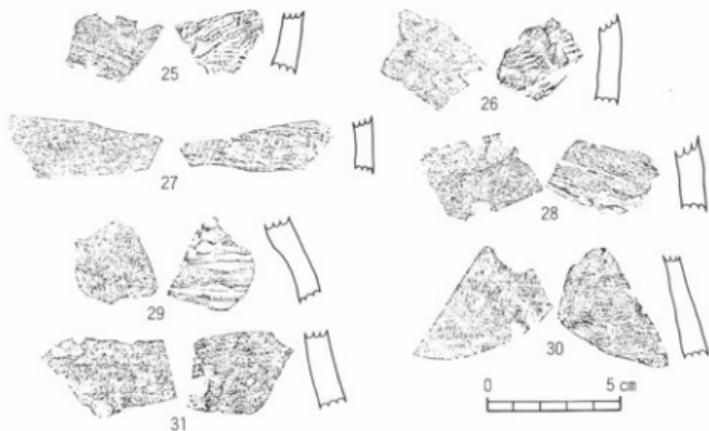


写真15 須恵質土器(2)



第9図 須恵質土器実測図(3)

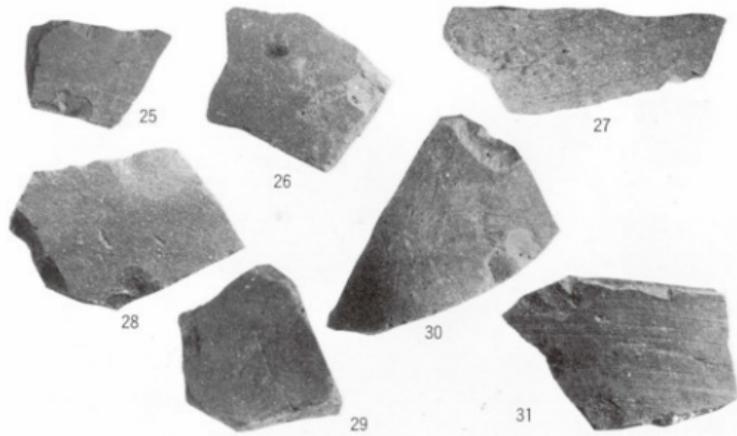


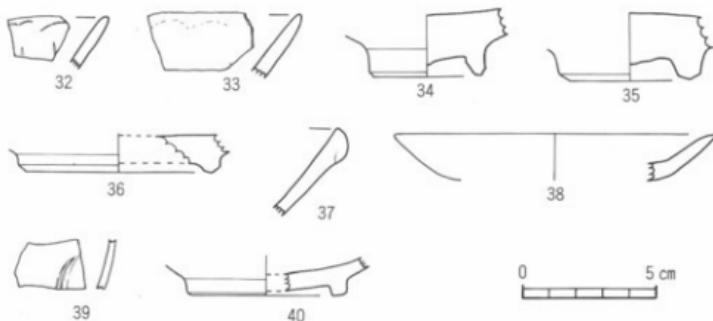
写真16 須恵質土器(3)

### 3 青磁、白磁(第10図・写真17)

本遺跡での青磁・白磁の出土点数は少ない。

32はヘラ書きによる蓮弁文の碗である。色調は濁青色を呈し内外面とも粗い貫入が入る。33は退化した蓮弁文がわずかに認められる青磁碗で、釉は厚くかかる。34～36は青磁の底部であり、発色も甘く粗い貫入が入る。

37は玉縁口縁をもつ白磁碗である。玉縁はやや広くかえりも明瞭でない。釉は外面では口縁部のみで、口唇部には釉だまりがある。38は復元口径約12cmを測る白磁皿である。39は内面に櫛描き文をもつ白磁、40は見込みに圈線を描く白磁皿である。



第10図 青磁・白磁実測図

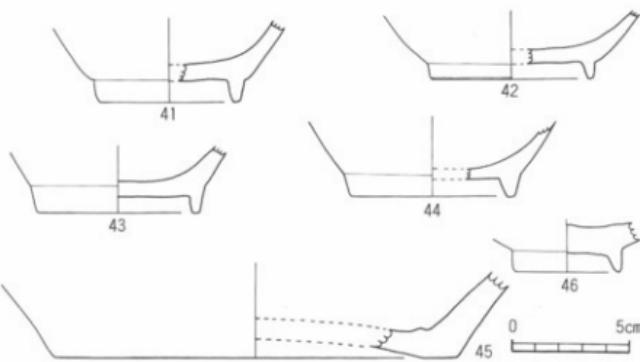


写真17 青磁・白磁

#### 4 陶磁器、染付・摺鉢（第11図・写真18）

本遺跡からは高台及び高台際から斜にストレートに立ち上がる器形で磁器質の土器の一群が出土した。これが41～44である。41はわずかに内傾する高い高台を有し、この高台際から直線的に外反する。口縁部を欠くため上位の形状は不明である。釉は内外とも胴部までに白釉をかける。胴部下位から高台は露胎である。胎土は固く焼しまり磁器質となる。すべて碗である。

45, 46は内外面とも釉を施したもので、45は甕、46は碗と思われる。47, 48, 49は染付碗、50～52は摺鉢である。摺鉢は茶褐色を呈し50, 51は全面、52は7条を単位に櫛目を描いている。



第11図 陶磁器実測図

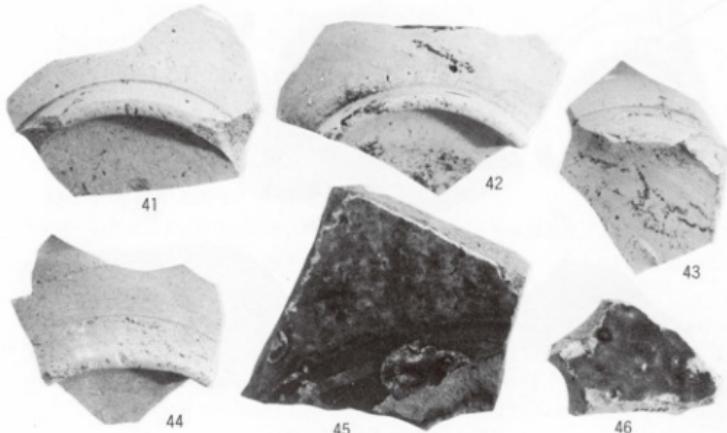
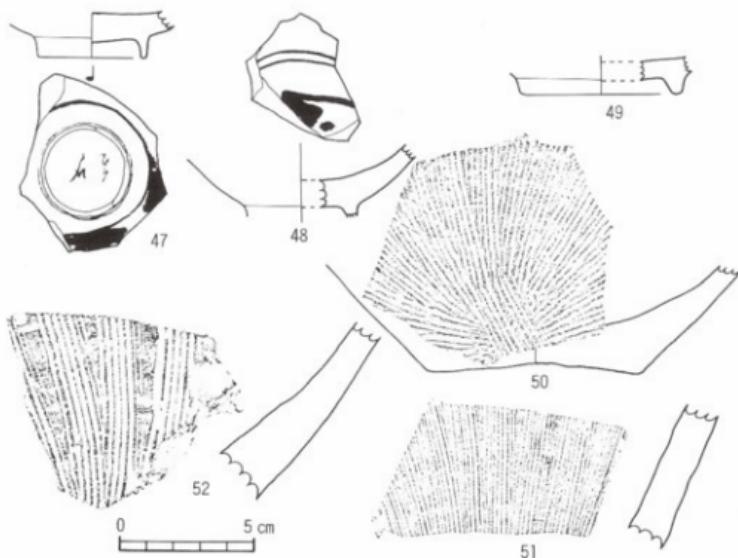


写真18 陶磁器



第12図 染付・摺鉢実測図

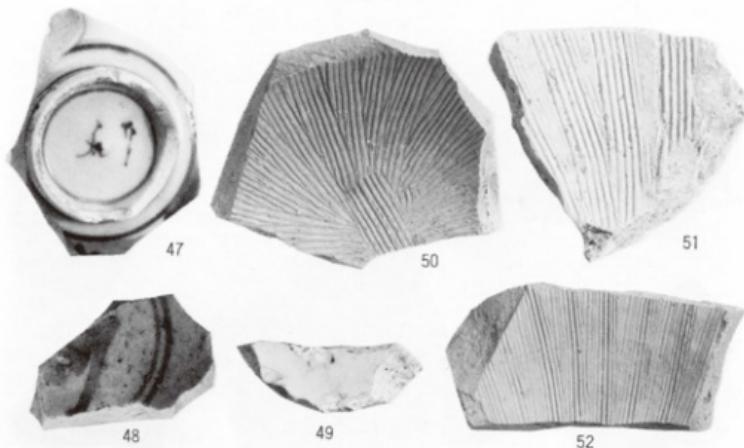


写真19 染付・摺鉢

## 第5章 まとめ

本遺跡の発見の契機となった昭和58年の分布調査で縄文時代の土器片を多数採集したこと。2つには沖永良部島内における遺跡の立地は、中甫洞穴にみられるように居住の場を鐘乳洞に求めるか、あるいは住吉貝塚<sup>10</sup>や神野貝塚<sup>11</sup>等海岸近くに求めるもの等、その立地は時代差を考慮しても共通点が多い。この点、本遺跡は内陸部の丘陵地に立地することで、発掘調査の結果が注目されていた。

ところが、調査の結果、遺跡包含層はすでに削平されて皆無状態であった。しかしそれでも縄文時代の土器、須恵質土器、布目痕のある土器、青磁、白磁、染付、陶磁器等が出土した。

これ等の遺物は細片で全体の形状を知り得るものは皆無であるが、遺物の存在は、遺物が該当する各時代において、本地点が生活の場であったことをうかがい知ることはできる。

遺物のうち縄文時代の土器は細片も含め多数出土した遺物の1つである。剥落や細片のため文様、器形は不明である。この種の土器は中甫洞穴でも散見されることがあるから今後資料の増加を待ちたい。

須恵質土器は南西諸島に多く出土するもので「類須恵器」と呼ばれ、本土の須恵器と区別して分類されていた。<sup>12</sup>肩部にヘラによる平行波状沈線を施し、軟質に焼上ること等を特徴としていた。生産地は不明であった。ところが昭和58年、大島郡伊仙町に類似する窯跡が発見され、ついで昭和59年度発掘調査が実施された。この古窯跡出土と比較検討してみると本遺跡出土の12、13、16、17、25等は類似することがわかった。詳細な検討は後日に待ちたいが、カムイヤキ古窯跡群と一致することが明確になれば、本遺跡は消費遺跡として位置付けられる。

なお9、10、16、～22、27、28等の胎土中にはさんご礁粉末が混在していることから、窯跡の特定は不可能でも、少なくともさんご礁を含む粘土の利用できる地域ということとなり、その範囲は限定される。なお16等にみられる綾杉状叩目は、カムイヤキ古窯跡に多くみられる。

6は小片で器形等は不明であるものの、内面に布目痕が認められる土器である。

この種の土器については、里山勇廣氏によって集成がなされ、氏は「布目A土器」と仮称している。<sup>13</sup>

出土遺跡は沖縄のフェンサ城貝塚<sup>14</sup>や具志川城跡<sup>15</sup>のはか、奄美大島でも、里山氏の報文によると6遺跡が挙げられている。

その後、長浜・金久遺跡<sup>16</sup>、本遺跡に出土したので、8遺跡となった。ただ、奄美大島以北の種子・屋久島までには及んでいない。

時期についてはいままだ明確ではないが、手広遺跡ではフェンサ城貝塚のフェンサ下層式系の時期とし、長浜・金久遺跡では、兼久式土器をⅥ類に分類したうちのV類土器該当時期に比定した。<sup>17</sup>

そして、年代を9世紀に求めている。本遺跡出土の布目痕土器は1点で、しかも耕作土中より出土したため、共伴関係もつかめないが、前述の類例と相違ないものと考えられる。

これ等のはか、玉級口縁をもつ白磁等が出土した。この地はアーニ・アニディル（赤嶺の赤

横殿）に関する口伝があること。このアーニ・アニディルが13世紀以後であることなどから、関連性もうかがえる。

そのほか、現代も施設し利用するというスクニィッシュと呼ぶ排水施設の検出は、土地に対する人間の智慧をみる思いであった。

遺構・遺物の遺存状況は良くなかったが、出土遺物を通して赤嶺原の土地に刻まれた歴史をかい問見ることはできた。

(注)

- (1) 河口貞徳・本田道輝・瀬戸口望「中浦洞穴」『鹿児島考古17』1983
- 河口貞徳・本田道輝「中浦洞穴」知名町埋蔵文化財発掘調査報告書(1)知名町教育委員会 1984
- " " " (2) " 1985
- (2) 河口貞徳他「奄美大島の先史時代」『奄美その自然と文化』九学会連合奄美大島共同調査会編 1959
- (3) 高宮廣衛「沖永良部島神野貝塚発掘調査概要」『鹿大考古2号』鹿児島大学法文学部考古学研究室 1984
- (4) 河口貞徳氏教示
- (5) 白木原和美「類須恵器集成」『南日本文化第6号』鹿児島短期大学南日本文化研究所 1973
- (6) 義憲和・四本延宏「亀焼古窯」『鹿児島考古18号』1984
- (7) 新東晃一・青崎和憲他「カムイヤキ古窯跡」伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(3) 1985
- (8) 里山勇廣「奄美諸島発見の内器面に布目痕を持つ土器について—表面採集資料を中心に—」『南島—その歴史と文化—4』南島史学会編
- (9) 友寄英一郎・嵩元政秀「フェンサ城貝塚調査概報」『琉球大学法文学部紀要』 1969
- (10) 新田重清「具志川市具志川城表探の考古資料について」『沖縄県立博物館々報No.7』 1974
- (11) 弥栄久志他「長浜・金久遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(3) 1985
- (12) (10)に同じ



## あとがき

発掘調査前半は雨にたたられた。南の島とはいえ1月の雨は鳥肌をつくり、吐息は白くなりながら消えた。しかも遺跡の土質は粘質土であるために、足にまとわりつき、みるみるうちに大きくなっていく。

こんななかで、発掘調査はむろん、スコップや小グワを持つのは初めてという人も含めて、いっしょけんめいに従事された。皆無であった考古学的知識は、自分で掘り出す土器にうながされて豊富となり、知識を知る悦びとかわっていった。

ようやく後半、晴天が続き調査も順調に進んだ。遺跡そのものはかんばしくなかったが、楽しい発掘調査であった。雨にもまげず、がんばってくださった方々に、心からお礼を申したい。

発掘調査は1月23日に終った。もう緋寒桜の開花が休憩時間の話題となっていた。

知名町埋蔵文化財調査報告書(3)

## 赤嶺原遺跡

発行日 昭和60年3月30日

発行者 知名町教育委員会

印刷所 有限会社 朝日印刷